

会 議 要 録

会議の名称	令和2年度酒田市文化芸術推進審議会(第2回)
開催日時	令和3年2月27日(土) 午前10時～午前11時30分
場 所	酒田市民会館「希望ホール」練習室1
出席者	<p>○出席委員</p> <p>中川 幾郎 委員、熊倉 純子 委員(リモート参加)、市原 多朗 委員、 工藤 幸治 委員、上松 由美子 委員、田中 章夫 委員、阿部 直善 委員、 加藤 聡 委員、加藤 真知子 委員</p> <p>○欠席委員</p> <p>白旗 定幸 委員</p> <p>○事務局</p> <p>村上教育長、本間教育次長 (社会教育文化課)</p> <p>阿部課長、佐藤博樹コーディネーター、村井課長補佐、池田主査兼係長、佐々木主査、 菊池主事、佐藤推進員</p>
<p>1. 開会(事務局)</p> <p>2. 審議会会長あいさつ(中川会長)</p> <p>3. 報告</p> <p>事務局:</p> <p>資料1、新財団設立についての説明を行う。1、公益財団法人土門拳記念館と公益財団法人酒田市美術館の合併について。目的は二つの財団を統合し組織体制の充実、財務体質の強化を図り、さらに事業を総合的かつ計画的に推進していくということである。合併の方式は既存の両財団を解散し新財団を設立するという手法を取っている。新財団の名称は、『公益財団法人さかた文化財団』。令和3年3月31日付で両財団が解散し、4月1日に新財団が設立する予定になっている。2、新財団の事業方針について。今まで財団法人土門拳記念館が酒田市写真展示館、財団法人酒田市美術館が酒田市美術館の指定管理業務を行ってきた。今までの正式名称が“酒田市写真展示館”だったが、土門拳記念館という名称が消えるため条例を改正し、建物の名称そのものを“土門拳記念館”に変更した。土門拳記念館については、土門拳氏の残した功績と現代における作品の意義と魅力を伝えること、酒田市美術館については、地域を支える美術館として近代及び現代美術作品を中心とする収集展示や市民の創作活動の発表の場であることを柱として提供していきたいと考えている。取り組みについては今まで通りになるが、3、新たな取り組みとして合併を契機に新しい事業を始めたい。(1)共同展示事業として令和3年度から今森光彦展を酒田市美術館と土門拳記念館の両会場で開催する予定である。(2)教育普及事業として、今までなかなか小・中学生が美術館、写真館に来ないという実情があり、解決策のひとつとして、市の教育研究所の先生方と一緒にスクールプログラムを作成した。令和3年度から試行的に授業の一環として土門拳記念館、酒田市美術館に来てもらい事業を開始する。予想以上に学校からの申し込みがあり、その対応に苦労しているが、手を挙げてくれた学校はなるべく全て受け入れる方向で調整している。(3)その他として学芸員の合同研修会を定期的に行い、共同の調査研究事業や館のPR、情報提供等を行っていきいたいと思っている。現在、学芸員は土門拳記念館に1人、酒田市美術館に2人だが、新年度は両館1人ずつ増員し土門拳記念館が2人体制、酒田市美術館が3人体制となる。一つの財団になることで、学芸員がそれぞれの館に固執することなく5人体制で両館の活動をしていくことになる。</p>	

会長：

この報告について質問、意見がある方はご発言ください。

委員：

両館単独で山形県博物館連絡協議会と全国美術館会議の会員になっていると思うが、今後はどのようなのか。

事務局：

新財団として加盟する。

委員：

学芸員の選考はもう終わったのか。

事務局：

募集・選考は終わり、採用される方も決定している。土門拳記念館の学芸員は男性で東京から移住してくる。美術館の学芸員は女性で宮城県の方である。

4. 協議

(1) 令和2年度事業報告

事務局：

令和2年度の主な事業について、資料3で報告を行う。

SAKATA アートマルシェについて(資料3、1 ページ目)、本事業は当初別日程で予定していたアート展「いろいろな展」と同時開催とし、9月15日から9月27日の期間で酒田市美術館・出羽遊心館を会場に実施した。イベントについては、酒田市美術館中庭を会場に、山形交響楽団によるコンサート、紙芝居、自然光と風を利用した工作づくり等を行った。また、出羽遊心館では、庭園を含めた全館を会場として、琵琶や箏の演奏、酒田舞娘による演舞、朗読劇、フラワーアートの実演展示等を行い、いずれのイベントも幅広い年齢層の多くの市民の方々からご来場いただいた。密を避けるために、全てのイベントに人数制限を設け事前予約制とした。アート展については、障がい者のアート作品の展示会を一昨年からはじめ、今年度3回目となる。企画展名を「いろいろな展」とし、酒田市美術館市民ギャラリーと出羽遊心館を会場として、酒田市出身の画家・佐藤真生氏の作品10点と、市内在住の障がいのある方々の作品125点、市民の方々に公募し描いていただいたアマビエ作品154点を展示した。佐藤真生氏、山形市のギャラリーららの武田氏及び酒田市美術館の学芸員の協力を得ながら、作品展示の方法や作家の紹介の仕方など、より作品が映える展示を心掛けた。また、酒田市社会福祉協議会からは、作品募集・展示・期間中の受付・作品監視等の業務に加え、多くのボランティアスタッフを手配していただいた。事業実績と課題について(資料3、3 ページ目太枠)、参加者・入場者の皆様からは久しぶりのイベントということで、概ね好評をいただき、また幅広い年齢層の方々からご鑑賞いただくことができた。普段あまり訪れることのない2館に初めて入ったという方も数多く、それぞれの建物の美しさ、庭を含めた開放的な雰囲気の中で、多種多様なアートにゆっくりとふれる機会を市民の皆様にご提供できたことは、大変有意義であったと考えている。課題については、企画展中のボランティアの確保、また障がい者の方々の作品制作時間を十分に取るために、もっと早い時期に事業説明が必要である等があった。

ダンスと音楽によるアウトリーチについて(資料3、19 ページ目)、本事業では、市内小学校児童に対して、プロのコンテンポラリーダンサー、ピアニストに身近に接しその感性と高い技術に直にふれるという貴重な機会を提供できた。アンケート結果にある通り、参加した児童からは非常に好評で、アーティストの表現するその自由性・独創性への驚きと喜びの声がアウトリーチ会場で数多く聞かれた。しかし、1コマあたりの時間を十分に設けることができず、児童にアート体験してもらった時間が短かった等が反省点である。来年度はこの課題を解消し、さらにアウトリーチを充実したものに発展させたいと考えている。

アートスタート事業「おんがくとえほんのおへや」について(資料3、23 ページ目)、これは密をさけるために、回数を当初予定より増やして実施した。コロナの影響で外出の機会も減り、親子で家に閉じこもりがちな時期に、希望ホールの広い空間でのびのびとアート体験していただける環境を提供でき、大変有意義であったと考えている。加藤真知子委員からは、講師として事業の組み立て・コロナ対策へのご助言など多岐にわたりご協力いただいた。

オンラインイベント「庄内弁をおもしろく学ぼう」について(資料3、30 ページ目)、これは文化芸術推進プロジェクト会議作業部会から提案された事業で、当初はマルシェ会場でのイベントを予定していたが、コロナの感染拡大防止のため、You Tube での無観客・リモート配信に変更しての実施となった。方言について学術的な解説や地域性についての講話、方言での紙芝居・英会話など、様々な角度・視点から方言の魅力・価値を発信できたと考えている。

サポーター事業について(資料3、32 ページ目)、新規登録者を迎え8月と11月に研修会を行なった。なお3回目の研修会も予定したが、2度目の緊急事態宣言が出されたことにより中止とした。第1回研修会は、クリエイティブコーディネーター佐藤ヒロキ氏から、レセプションニストの役割についてご講義いただき、第2回研修会では新潟市民芸術文化会館りゅーとぴあのチーフレセプションニスト田中恵子氏から基本的な接客業務について具体的に教えていただいた。接客について初心者である参加者がほとんどであったが、大変分かりやすく丁寧にご講義いただき、参加者からは大変好評であった。課題としては、継続して事業に協力いただける社会人登録者を増やすために、サポーターの活動内容・待遇の見直し、研修等のさらなる充実をはかり、魅力あるサポーター事業にしていくことが急務であると考えている。

会長:

全員ご発言いただきたい。

委員:

コロナ禍の中よく実施できたと思う。アートマルシェが非常に良かった。コロナ禍ということもあり弱者の芸術鑑賞の機会が少ない、発表する場も少ないという非常に厳しい状態だが、一般の人から見てもとても感動するような作品を拝見させていただき、とても嬉しかった。芸術家の作品ではないが、人間としての表現の作品、非常に大事な作品だと思った。できる限り多くの人にご覧いただきたいという気がした。展示作品を少なくして、松山、平田、八幡地区に巡回できないか。音楽については、もっと軽音楽、ジャズ、民俗芸能など幅広いジャンルにも踏み込んでもらいたいと思う。太鼓など、初めて参加してちょっとふれたら楽しめるような企画をしたら、より身近なものになると思う。

委員:

報告書について、今まで中川会長から指導いただいたことが全体的に貫かれていて、このやり方を市役所全体で学んでほしいと思う。事務局から人数制限をして開催したという報告があったが、この資料にはそのことが書いていなかった。市民会館に371名入ったということが多いのか少ないのかという点を誤って評価されない様に、注意書きとして記載した方が良いのではないかと。アートマルシェの中のいろいろな展に社会福祉協議会も事務の委託を受け協力したが、当方の担当者からは、準備段階から方向性が大きく変更となり、対応が大変だったという話を聞いた。それは企画運営がだんだん習熟していけば解決できることだと思う。このようなことがあったということだけ報告する。いろいろな展に、私は別の人を連れて3回行ったが、社会包摂の観点から考えてもとても有意義だった。しかも会場が出羽遊戯館と酒田市美術館ということで両方の会場も引き立って大変良かった。来年度事業にも関係すると思うが、加藤真知子委員から頑張ってもらったアートスタート事業について、これから新しくみなと保育園もでき、そこに支援センターも併設されるため、子育て支援センター、みなと保育園、八幡、平田、松山の子育て支援センター含め連携が可能なのではないかと思う。資料の訂正について、2

ページ、“酒田市ボランティアセンター”とあるが、“酒田市ボランティア公益活動センター”が正式名称なので訂正していただきたい。

委員：

事前に資料を届けていただいたことにすごく意気込みを感じ、これは見なければいけないと思わせられた。とてもよくまとまっていたし、見やすくて今の説明もとてもポイントをついたものだった。阿部委員からも発言があったが、しかるべき資料というものはこうあるべきだし、もっと分かり易さと簡素さを追求すべきではないかと思う。今までのような、分厚くて細かく法律等が載っているようなものに比べると我々にとってはわかりやすかった。「見てもいい」、「読めるなあ」と第一印象でそう思った。事業については、いくつかのものには関わった。アートマルシェでは山響のアンサンブルに参加したが、とても天気が良くお客さんがたくさんいて、コロナ禍でなければとても素晴らしいイベントだなと心から思った。酒田市側で十分なコロナ対策を取っていた。屋外での開催でもあったし、とてもいいイベントだったと素直に評価していいと思った。セットで美術館内を見られるということにしてあったのか。

事務局：

美術館中庭のイベント参加者には、市民ギャラリーのいろいろな展を見ていただくよう案内していた。

委員：

美術館内もたくさん人がいて、とても良いイベントだと思った。天気に恵まれたことが本当に良かった。金管楽器とはいえさすがに雨に降られては奏者も大変だったと思う。今年度大ホールで何もできなかったことを関係者が本当に悔しく思っていた。バロックアンサンブルのコンサートは思い切りコロナ禍だったが、その中で山響、仙台フィルとやらせていただいた事業だった。私は実行委員長の立場で、本当にお客様が入るのかと心配だったが、それほどPRする時間もなくチラシを作っただけにも関わらず400人近く入った。ジャンルを問わずこのようなことが起こるのだと思うが、皆、音楽や芸術に飢えていたのだと思う。大ホールに400人のお客様が入っていただき、当然お客様がいるとステージの奏者も頑張るといことに繋がりとても良いコンサートだった。大ホールに一般のお客様を入れて開催できた事業は、スタインウェイ演奏体験・大ホール演奏体験事業と、このバロックアンサンブルコンサートの2事業だけで、意義は大変大きくあったと思う。今年最初の希望ホールで行われた山響コンサートも、過去最高の来場者数を記録するくらいお客様から入っていただいた。我々も市民の皆様が芸術をお届けすることはとても大切なことだと改めて感じさせてもらった。コラボする、工夫をしていくことがこれほど大事なことだと感じたことはない。コロナに負けるな、ピンチは幸せだと思っている。

委員：

全体の事業の実施時期を見ると、7月～11月までの短期集中の事業展開でスタッフの方の苦労が伺えた。今報告があったように、私も8月～11月まで4ヶ月にわたり月2回ずつ、アートスタート事業の「おんがくとえほんのおへや」を担当した。非常に担当スタッフにお世話になったし、希望ホール小ホールという良い環境の中で開催できたこと、0歳の参加が多かったのだが、そうした子供たちにアートを届けることができたことがすごく嬉しかったと私自身改めて感じている。この件について反省も含めお話する。0歳～6歳までの未就学児のお子さんと保護者を対象としたが、実際は平日の開催ということもあり0歳～2歳までのお子様の参加がほとんどで3歳児以上は少なかった。中には保育園を休んで参加したという方もいた。0歳～6歳の年齢幅というのは発達の差がとても大きいので目的をきちんと届けるにはとても難しいと初めからわかってはいたが改めて思った。就学前のお子さんが対象の事業であれば、できれば対象年齢を6歳までの間の前期と後期で分けて考えたら良いのではないかと。2、3歳のお子さんは保育園等に入っているケースが多いので工夫した方がいいと思う。その点、令和3年度の事業を見ているとコンテンポラリーダンスに幼稚園、保育園が対象として入っている。幼児後期の事業としてこれはとても有効だと思う。それから気になったことが一つ。スクールプログラムとダンスのアウトリーチ事業の対象

学校に特別支援学校が入っているのか。対象に入っていて、募集もかけた結果コロナ禍もあるし申し込みがなかったのであれば良いのだが、最初から情報が届いていないのであればとても残念なことだと思うのでぜひ誘っていただきたい。2年前の若竹ミュージカルの印象がとても強く残っている。令和3年度のコンテンポラリーダンスに関しては講師の意向もあるとは思いますが、もし可能であればこのようなプログラムは特別支援学校の生徒さんも喜んで参加できるプログラムだと思うので、ぜひ対象校に入れていただきたい。

事務局：

今年度のダンスとピアノのアウトリーチ事業では、全ての小学校に案内をした。特別支援学級については、十坂小学校1校から参加いただき非常に好評だった。十坂小学校から川南全ての特別支援学級の先生方に情報提供していただいたようだ。来年度以降参加する学級が増える予定。特別支援学校については今回案内を出せていなかったため、来年度以降出せるように進めていきたい。スクールプログラムについては、今回特別支援学校に案内を出していない。これからきちんとお知らせできるようにしていきたい。

委員：

私もアートマルシェに参加させていただいた。野外にも陶器の展示があった。小さい子になった気分ですこをたどりながら両館の展示を見学した。今後土門拳記念館を含め一帯で色々な面白い活動ができそうだった。コロナ禍で人数制限などの工夫をされているのはとても良いことだとは思いつつも、行きたいがもう人数制限に達したかな？と思って遠慮した人もいたのではないかな。自分はアナログなので情報を見もしないで話をしてるが、例えば Facebook やホームページに、空き状況のような情報が流れていたのかということが少し気になった。もし空きがあれば行ってみようかなと思う人がいたのではないかなと思う。ダンスと音楽のアウトリーチについては、琢成小学校にたくさん来ていただきありがたかった。先ほど特別支援学級は十坂小学校のみと報告があったが、本校では各学年の中に支援学級の児童たちも一緒に参加し、楽しませていただいた。浜田小学校など他の小学校も同じようにしていたのではないかなと思う。枠を特別に分けるのではなく、一緒に考えていいのではないかなと思う。講師の先生方と、どうすれば子供たちを楽しませることができるのかなどたくさんのお話をした。今回のようにダンスと音楽と一緒に体験することは今までありそうでなかったという話の中から、今度はそれに言葉を入れるともっと豊かになるかなというお話もあったので、ぜひ講師の先生方のいろんな思い、アドバイスを受けながらより豊かなもの、新しいものに挑戦していくことができればと思っている。体育館に寝転がって生の演奏を聴くという贅沢な時間をいただき、子供たちは心から楽しいと思える時間だった。

委員：

会長ということで、ほとんどの事業に参加・鑑賞させていただいた。コロナ禍の中でよく頑張ったと思う。マスクをしていない人には、スタッフがマスクをしていただけませんか？と言にくいこともきちんと伝えていて、とても感謝をしている。障がいがある方だけでなく、一般市民も社会包摂という視点から考えていく必要があると思う。社会包摂とは「みんな」という意味。そこは気を付けて配慮していけばなお良いと思う。PR について話があったが、専門の職員が指導してくれるようになったのでその辺を頑張りたい。アウトリーチに関しては、やはりフェアにしていくことも大事だと思う。私の学区では参加していないのか、どのように伝わったのか、どのくらい教育委員会がきめ細かく参加の呼びかけをしたのかわからないが努力していただきたい。芸術文化協会会員の参加が思ったよりも少なかった。今後は芸文協の方に積極的に参加、あるいはボランティアとして協力してもらい、今後の私たちの考えを会員に伝えていかなければならないと思っている。酒田市民芸術祭の事業計画の中に、このプロジェクト会議の事業予定を一緒に載せたらどうかと思っている。市民の方々が鑑賞の機会を多く持つるように、広報活動の工夫をしていくことや、事業の案内をチャンスある度に知らせる努力も大切だろう。これは会員全員への PR にもなるし、年間の見通しもたつと思う。コロナ禍の中でスタッフ一同頑張ったし、笑顔も見えるし幸福感を持った若い職員もいて良かった。文化芸術に関する考え方や嗜好は千差万別。これを超越して、協力し

あいながら活動することが大切ではないだろうか。

委員：

先週新宿文化センターで『キジムナー時をかける』というオペラを日本オペラ振興会が実行した。出演者がみんなキラキラして変だなと思ったら、全員がフェイスガードをつけていた。客席は一人置きでほぼ満席、そして全員マスクという現状。東京藝術大学の声楽の授業では先生と生徒の間にパネルを立て、歌う生徒は必ずマスクをする、そして先生もマスクをしながら個人授業を行う。そうすると学生から、このマスクの方が声の透過率がいいよと情報交換があり、そのマスクを買いに走るという現状があるようだ。去年の11月に日生劇場の今年のオペラの為の主演歌手を選ぶオーディションを2本やらせてもらったが、非常にナーバスな状態で、パネル・床の消毒、本人は3分くらいしか歌わないが前後の準備と換気。実際に100人くらい聞きましたが膨大な時間を要した。東京ではまだまだこんな生活が続いている。私としては、新財団の設立の文面のところで小中学生を対象に学校のプログラムとして会場に来てもらうということは非常に嬉しい。私が小さい頃酒田に住んでいた当時、本間美術館に見に行くことや、ディズニー系の映画教室に行くこと、それは学校とは違う非日常で子供にもとても大事なことだった。先生が教えてくれる以外のことで良い刺激を受けることは、文化的にとっても重要なことだと思う。庄内弁をおもしろく学ぼうが30ページにあるが、例えば私たちが子供の頃「やばち！」と言っていたが、この「やばち」を標準語で言うと、「冷たい」、「濡れていて気持ちが悪い」、いくつかの表現を組み合わせないと表現できない。「やばち」という一言だけで豊かなものを持っている。今の子供はアニメを見たおかげで、きれいな標準語を話すので、中央に出ていくには少し障害が減って良い部分ではあるが、豊かな庄内弁が今後もこのように残っていくことは非常に良いと思う。何かの形で今後も同事業を継続してほしい。次に、合唱指導について、各学校の先生が子供たちをコンクールに向かわせるにはどうしたらいいか悩んでいる中で、中央で活躍している先生からの的確なアドバイスをもらうことは非常に有効だ。これが結局山形県のコーラスのレベルを上げることになるのは間違いないと思う。27ページ、スタインウェイピアノを実際に使わせてみるという事業は担当者としては非常に大変だと思うが、参加者が少なくてもいいので何とか細々でも続けていただきたい。みんながアップライトやグランドピアノにふれる生活環境ではない中、アップライトを普段弾いている者にとっては、グランドピアノの音の出る感じに差がある。若いうちに良いものにふれることはとても大切な機会。なんとか継続してやってもらえたら嬉しい。

会長：

文化というもののターゲティングが達成される道ができてきたと思いとでも喜んでいる。障がい者にとっての文化芸術活動の推進法ができて以降、計画もでき、各都道府県に障がい者文化芸術活動支援センターが設けられた。それをぜひ活用することをお勧めする。ブロックごとに集中的に研究・アドバイスをできるような拠点がまたできつつあるようだ。厚生労働省が頑張っていて、同省が調査を各施設に行っているが、その調査データを見ると、山形県はそんなこともないようだったが、施設には「当方は障がい者をお預かりする施設であり芸術に関して関わりを持つ必要はない」、反対に文化振興担当の課には「当方はアートを担当しているのであって障がい者を担当する課ではない」、という思い込みがあるという結果が出たことは双方共に問題である。これをどのようにクリアしていくかが日本全国の課題だという中間データが出ている。担当する者の意識というより、代表者の意識ではないかと思う。担当者の意識調査をすると皆、障がい者の文化芸術活動はやるべきだと思っている。やりたいたいが指示が出ない、そういう計画になっていない、施設のミッションになっていないということで、若い担当者たちが苛立っていることが見えてきている。幼児・小・中学生へのアクセスだが、先ほどの的確な指摘を加藤委員にいただいた。0～6歳児について、各自治体二通りの展開をしている。一つ目は0～3歳までの定期健診の会場で展開するという方法、二つ目は保育所、幼稚園、認定こども園などに直接行くという方法である。この場合だと3歳児より上の年齢層に対応できるので、今後の課題として聞いて欲しい。小・中学校のアウトリーチに関しては、一

番先進的なのは横浜市である。NPO 法人の ST スポットにコーディネートを依頼しているが、全小学校の 1/3 だけが実施できずに残っている。それはなぜ残っているのかというと合意がまだできていないからだ。学校の内部事情に大きく影響するのでこれはやはり学校の管理者の校長、教頭先生、そして担当の先生と詳細に話を続けていくという努力を当局がしていかななくてはいけない。制度として決まっているのだから受け入れるのが当たり前というやり方だと、学校側としては大きなありがた迷惑の文化になる危険性がある。芸術文化協会の参加がもう少し望まれると良いと工藤会長がおっしゃったことはありがたいことで、全て芸文協のアーティストが対応してくれれば、本当はともありがたい。でも対応できないというところが現実だと思うので、そこをどれだけのリソースで補えるかが大きな課題である。芸文協と割合はわからないが、学校へのアーティスト派遣事業・ミーツアート事業は大きく関わっていただくことが望ましい。博物館とのジョイントやコラボレーションは大変良い事である。博物館が子供たちに与える、ただならぬ育成効果は立証されている。子供時代に地元の郷土資料館や博物館に行った子供たちの90%以上が、その町を大好きになるということがわかっている。中学生までの間に地元の誇りとされている博物館に行くことはすごく大事なことだ。両財団が合併した後の事業として断固としてやり抜いてほしい。これを何とかすることが逆に博物館を強くする、財団の支援を熱くするものだと思う。文化の社会保障という姿勢をマルシェでは濃厚に出せた。言葉で言うならば、強い者、暇な者、金のある者、健康な者ばかりが楽しめるものではダメで、むしろその社会的に取り残されるところにこそ、アートの姿勢を出していけるということが酒田の強みだと思う。

委員：着々と進んでいるようで大変安心した。何より審議会では珍しいことだが、審議会メンバーの皆様がこまめに現場に足を運んでいただき、審議会メンバーの眼差しで見ていただき意見をいただけることは素晴らしいと思う。懸案であった財団統合が予定通り進んだことはびっくりしているが本当によかった。新しいコーディネーターが色々進めてくれていることに非常に期待をしている。ゆっくりでいいので着実に振興ビジョンを方向性に則って進めていってほしいと思っている。

(2) 令和3年度事業案

事務局：

令和3年度事業の主なものについて(資料4)、SAKATAアートマルシェ2021(資料4、1ページ目)は会場を酒田市美術館・土門拳記念館・出羽遊心館・公益研修センター等とし、今年度に引き続きアート展「いろいろな展」との同時開催とする。また、酒田市出身の漫画家佐藤タカヒロ氏の企画展を実施する。佐藤タカヒロ氏の企画展については、2018年ご本人がお亡くなりになった後、ご家族から地元の酒田市美術館でぜひ展示を行い、幅広い市民の方々からタカヒロ氏のアートにふれて欲しいとの強い希望があり実現するものである。今年度のマルシェで実施予定であったが、コロナにより1年延期となった。マンガの原画展示に加え、関係者による講演会も予定している。「いろいろな展」については、出羽遊心館を主な会場として佐藤真生氏他酒田市出身のアーティストの方々の作品と、障がい者の方々のアート作品を展示する。その他、各種ワークショップ・朗読劇・ミニコンサートなどを土門拳記念館・酒田市美術館中庭・出羽遊心館等で開催する予定である。土門拳記念館・酒田市美術館の新財団の皆様と丁寧に連携を取るとともに、酒田市社会福祉協議会・市内福祉施設・やまがた障がい者芸術活動推進センターの皆様からご協力をいただきながら進めていく。

コンテンポラリーダンサー中村蓉氏によるダンス公演・公募ワークショップ事業について(資料4、1ページ目)、本事業は、一般財団法人地域創造の「公共ホール現代ダンス活性化支援事業」の採択を受け、地域創造より事業の企画から実施までのサポート、アーティストとコーディネーターの派遣をいただき実施するものである。ワークショップを通してコミュニケーション力を育み、世代を超えた交流・自己肯定感を高めるきっかけづくりと公演によるダンスの魅力の発信を目的としている。コンテンポラリーダンスによるアウトリーチ・公演事業(資料4、2ページ目)とともに、市民にむけてコンテンポラリーダンスの魅力と楽しさを継続して伝えていける事業展開を目

指している。

ギター渡辺香津美・サクソ須川展也他によるジャズコンサートについて(資料 4、2 ページ目)、今年度中止となったウーン少年合唱団コンサートに代わる事業として、一般財団法人自治総合センターの助成を受け、低廉な料金設定で日本を代表する著名なアーティストの演奏を鑑賞する機会を市民の方々に提供するものである。

音楽劇「あらしのよるに」について(資料 4、2 ページ目)、これは絵本の名作「あらしのよるに」を原作に、芝居・ダンス・音楽を融合したダイナミックなステージとなっている。子供たちの豊かな感性と創造力の育成を目的に日生財団の助成を受けて、市内小学校低学年を無料で招待するものである。

共催事業について(資料 4、3 ページ目)、いずれも今年度コロナにより延期となり、内容を変更したものもあるが来年度の実施となっている。本市の「社会包摂と育成」の方針に沿うもの、市の賑わい創出等公益性のあるものとして共催事業としている。

文化芸術推進サポーター事業・人材育成事業について(資料 4、5 ページ目)、人材育成を目的とし研修・ワークショップ等の内容の充実を行う。多様な市民が文化芸術に参加しやすい環境づくり、学びの場を提供し市民との協働・共創を目指す。

委員:

「いいいろいろ展」で見たことを踏まえてだが、小学校の時に先生から絵が上手だねと褒められたのが今に至って絵を描いているという解説があったと思うが、そういう意味で財団が統合して教育普及事業に取り掛かることにとても期待したい。地域における文化芸術及び歴史に関する事業とあるが、“及び歴史”と書いてあることを活かすためにも資料館、図書館の市史、アーカイブとの連携をぜひやっていただきたい。来年度また「いいいろいろ展」があるが、今回の資料に“障がい者が 218 人”と人数が記載してある。これはどのようにして障がい者の人数を把握したのか。施設の人が連れて来た人数を数えたのだと思う。書くことの意義もそうだが、障がいのある方が来ていることはとても大事なことだが 218 人という数字が正しい数字なのかどうかということもあり、そのあたりは次回考えていった方が良く思う。その都度障がい者手帳を出したわけではないと思うので。

事務局:

障がい者の入場数については阿部委員のおっしゃる通りで、施設の方が連れてきてくださった人数を数えているため、本当の人数はもっと多い可能性もある。正しい数字なのかと言われると正しく把握できていない。来ていただいたことをお知らせしたく人数に加えた次第である。

委員:

令和 3 年度の事業実施にあたり、今年度のアンケートで出された要望などをできるだけ取り入れてさらに充実した内容の事業にしたらどうかと思う。例えば合唱指導の件で市原委員からとても良い事業だから継続してほしいという意見があり、私も同感だ。しかし感想を見ると時間がとても短くて残念だったとあった。目的には“深める”という項目があったので、その目的に果たしてこの時間でどう近づけたのか、なかなか困難な状況だったのではないかと思う。たくさん生徒に経験をさせたいという気持ちは分かるが、講師や学校側の要望、実情に配慮しながら連携、調整をしていくことが必要なのではないか。それから、地元の人たちの活躍の場を広げてほしいと思う。私も地元の一人なわけだが、昨年講師を引き受けるにあたって酒田にはいろんな活動をしている人がいるのでそういった人たちをできるだけ活かしてほしいとお願いした。令和 3 年度引き受けるにあたって、4 回のうち 2 回を担当させていただく。残り 2 回は別の講師の方になってありがたいと思う。コロナ禍で活動の場を失っている芸術関係の方も多いため、適材適所ではあるが、様々な人が酒田で活躍できるようにしていければいいと思う。できれば講師というのは、長く固定化せず、いろんな人が活躍できるように配慮したほうが良いのではないかと思う。

委員:

学校現場での言い訳とお願いを少しだけ。様々な事業展開をしていただき、とても有意義な中身だと感じている。例えば合唱の件にしても講師の方の都合もあるので一概にこの日とは決められないとは思いますが、例えば、10月の3週目当たりで予定して欲しい、あるいはパート練習の仕方を計画しているので10月の頭に入れて欲しい、というようなアナウンスがないと、学校には次から次へと予定が入り、結局「受けられない」という答えが主催者側に返ってきてしまう。おおよそでいいので、早めに教えていただけたら嬉しいと思う。中村蓉氏のコンテンポラリーダンスも来年の2月ではあるが、今年度中に企画内容を学校側に伝えて欲しい。2月は卒業式に向けて忙しく動く時期に入るので、お互いにいい気持ちでいい成果を出すために、早めのアナウンスをお願いしたい。

委員：

今年度、各事業の世代別の参加人数の集計をとっているが、全体の集計はとっているのか。どんな事業でも参加人数、世代にばらつきも出てくるのは当然で、80歳以上の参加が少なくなってくる。川南の会場も悪くはないが、非常に不便で費用もかかる。交通の便に配慮してほしい。

(3) 令和4年度以降の事業について

事務局：

今年度実施を見送った市原多朗マスターコースと、市民参加型演劇公演「拳 土門拳とその弟子たち」について関係者の方々と相談した結果、新型コロナウイルスの収束を待ち改めて令和4年度の事業実施に向かうこととした。市原多朗マスターコースは、3回目の集大成となり今まで以上に、教育機関や市内文化芸術団体と連携を図りながら丁寧に進めていく。来年度の方向性について市原委員、審議会の皆様のご意見をお伺いしたい。

委員：

市原多朗マスターコースをやらせていただくことで、出演者それぞれが非常な伸びを示している。例えば前回濱松さんがトスティを歌わせていただいたが、その結果、奈良で行われたトスティコンクールで1位を獲得した。あの合宿中色々悩んでいたがそれを契機に自信を得て花開いた。この間の『キジムナー時をかける』という沖縄のオペラではソプラノの金城さんがとてもいい演奏をしていて、酒田でマスターコースを2回体験させていただき勉強したことで結果が出てきていると思う。こういう機会をいただいて演奏する側の代表として、この場を借りて感謝申し上げる。

委員：

情報収集専門のネットワークが必要なかもしれないが、ぜひ情報収集に努めて、楽しいばかりではなくて何を考えさせてくれるワークショップなのかを考える必要がある。また、参加性に優れたアーティストがまだまだ全国にたくさんおり、そこをしっかりと発掘して都会に負けないいいプログラムにしていだければと思う。

会長：

令和3年度、4年度に出た意見に特徴的なことを総括する。田中委員からもう少しデータ集計をきちんとすべきという意見があったが、会場が分散していて集計しにくい部分もあるが実際に来場している年代を分析することはとても大事なことだと思うので、ぜひ取り組んで欲しい。ご指摘にあった、もっと高齢者や交通弱者が来やすいようにということは大変重要な点だと思う。加藤委員からあった市内のアーティストさんをもっと使った方がいいとの意見はもちろんその通りで、私からもお願いしたところだ。大事なことは、だからと言って固定化しない様にとことだ。上松先生から事業のアナウンスは早めにとあったが、仮確定みたいなことができる仕組みを考えていこう。そうしないと学校は年度の後半しか受けられないという危険性が出てくる。

教育長：

私がよく思うのは審議会の中身というのは聞き方によってはとても楽しくて、こんなに酒田のことを真剣に考えている会議があってこんなに意見が出ているということが市民の皆様に伝わってほしいという気持ちがある。コロナについては、数々のイベントが中止されるという緊急事態となってしまった。文化芸術が誰のために必要だっ

たのかということ深く考えさせられる時期でもあり、私としては文化や芸術が食べ物のように、それを食べて生きている人たちがたくさんいる、ほとんどの人がそうだということ。一番最初に文化芸術がたたかれる、しぼんでしまうイメージを持つかもしれないが、社会包摂を含めて食料にほぼ匹敵する、人によっては食料以上に必要なもの。それを食べて生きている人がどれだけいるかということを感じながら過ごしてきた1年間だったと思う。そういう面ではもう少し行政ができることを考えていかなければと思っている。審議会の機能を何とか活かしたいとずっと思っていた。立派な審議会であるから、それに応えられるような実績が積みあがってほしいと思う。今回十分に検討したのは予算化のプロセスである。審議会の意見を反映して大枠を組み立てる時に、来年度の話をしていては間に合わないということを実感した。したがって今回も令和4年度の話も先出したがそういうことをしていかないと予算化できない。令和3年度はほぼ出来上がっていることを議論している状態で、本来はまだ非常に柔軟な状態で議論する必要があるとあってそういう機能をこの審議会の中にもたせていきたいと思う。そのためには原案を作る事務局の主体性、課題意識、判断力、これがものすごく大事になってくる。そしてご指摘があった通り、マネジメント、関係者とのネットワークで我々は人に会いに行かなければならない。例えば今回スクールプログラムで学芸員の方が大変だという声が聞こえてきたので、学芸員をお手伝いする方をどうやって募りたいかを緊急に打ち合わせするつもりだ。芸術系の学生の力は借りられないか、あるいは地元の芸文協の美術系の方々が学芸員をお手伝いすることはできないか。様々な方法を考え、みんなでプロジェクトを作っていくということを考えなければならぬと思う。今日も貴重なご意見を賜ったことに感謝申し上げます。

事務局：

本日、令和3年度の酒田市文化芸術推進審議会の年間スケジュール案を追加した。令和3年度の酒田市文化芸術推進審議会の年間スケジュール案である。来年度、第1回が6月、第2回が7月、第3回が2月、計3回審議会開催させていただきたいと考えている。今教育長が申し上げた通り、6月の段階で令和4年度事業に向けての意見交換を行いたいと考えている。令和2年度の社会教育文化課だけの事業ではなく市全体の文化事業を含め事業報告書を提出し、有効性の評価等をさせていただきたいと思っている。

会長：

今日は皆様のおかげで深い議論ができたことを感謝している。先ほど市原委員からトスティコンクールの話題が出たが、関係している部分があるので少し報告する。私は奈良市の文化審議会会長をしているが、奈良市ではトスティコンクールを含めて、一般公募の補助金の対象であるため指定席ではなく、競争しなければならない。奈良市が持っている市民文化活動の小型の支援の補助金ではなく、奈良の都市としての誇りにつながる事業ということで100万単位の補助金である。それよりもっと上にいくと、川瀬直美さんの“なら国際映画祭実行委員会”しか応募がない。第2グループのトスティコンクールは奈良の知名度を上げる誇りとなるようなコンクールということで、順位で言うとはほぼ1位で当選する。これは市内のNPO団体がやっているのだが、そのNPO団体よりもトスティコンクールの方が有名になってきている。市原委員のおかげで奈良も助かったと思っている。社会教育の世界でもすでに社会教育主事がなくなってこれからは社会教育士になる。社会教育士に変わるということは社会教育の世界のリノベーションが起こっているのもっと地域と関わり学校と地域をつなぐことが最も大きな使命になっている。私はそういう意味で文化のサポートをしてくれる方、社会教育士に近い位置づけになってくるような気がする。そこら辺の流れもプログラミングの中に入れてもらえたら良いと思う。学校との連携については、酒田の売り物にしていったら良いと思う。学校と福祉施設、あるいは保育施設。社会福祉と教育に重点を置いた酒田の文化芸術政策が根底にあるということこそ市民のバックアップが得られる大きな力になると思っている。そういう意味でサポーターの育成にも大きな期待を寄せているところだ。さらにホスピタリティを学ぶだけでなく、まさしく人権ということを知っているということと、アートは一部の特権階級のものではなく、それにアクセスできない人がさらに辛い思いをしてしまうことにならないようにしなければならない。わからないという人にはドイツ

の首相の「コロナ禍においてアートは生き死に関わるものだ」という演説を聞かせたい。そういう精神でやっているのが酒田なのだと、私はあちこちで伝えていきたいと思っている。

6.閉会

【以上】